

ブランコの少女

THE GIRL IN A SWING

上

リチャード・アダムズ 百々佑利子 訳



ブランコの少女

THE GIRL IN A SWING

上

リチャード・アダムズ 百々佑利子 訳

ブランコの少女 上

1989年10月5日 初版発行

訳者 百々佑利子
発行者 竹下晴信
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社評論社
(〒162)東京都新宿区筑土八幡町2-21
電話(03)260-9401 FAX(03)260-9408
振替東京 8-7294

¥1500.-)

(本体,1456.-)

ISBN4-566-02084-3 落丁・乱丁本は本社にておとりかいたします。

——ロザモンドへ愛をこめて——

ブランコの少女
上

一日じゅう、風が吹きまくっていた——七月末にしてはおかしな天気だ——風は生け垣から生け垣へ渦を巻いて通り抜ける。目に見えない差潮さしおが海藻の間を縫うように。風は、生け垣という生け垣を道連れにしようと力んで吹く。根負けしたニワトコやイボタノキの区画は、両側の粘り強くふんばるサンザシと引き離されて、道路側へたわんでしまった。風は、紫色のクレマチスを支柱から引きはがし、低木の茂みのはずれに立つオークの木々から小枝や緑の葉をむしりとった。

一時間前、風は庭から去った。しかし日暮れどきの今、風が四マイル南へ広がる丘陵ダウンスの尾根伝いにまだ暴れまわっているのがここからも見える。コッティントンの森のブナの木々は愛想もなくそびえ、色あせた空を背景に騒がしく揺れている。ここには草の葉一本そよがす風も残っていないという

のに。それに、ほとんど物音がしない。クロウタドリはバツタ同様黙りこくり、コオロギは、ヒイラギの密生した黄色い葉むらにいて、夜ごとの鳴き声はまだ上がらない。もの皆、宵闇に色を変えていく。大輪のダリアの花——ブラック・モナクとアンナ・ベネディクト——はもはや暗赤色に輝いてはおらず、灰色がかりくすんでぬつと立ち、明かりのともされていない大提灯が棒に縛りつけられているみたいだ。

丘陵が近寄ってきた——ビャクシンやブナやイチイの木々がひどくはつきり見分けられ、——つい、コッティントン・ヒルの山腹に石を投げつけられそうな気がする。だが、幻とも見まがうこの光景は、雨を含んだ空気の拡大現象だ。風のあとは、雨になるだろう、おそらく夜半前に。雨は滂沱としてやむことなく、タチアオイやユリに、オークの木々に、小道の向こうに広がる大麦や小麦の畑に降り注ぐだろう。

カリンは、トンボさながら風や日光や天気 to 敏感だった。雨が降る夜、フランス窓を開け放ち、雨だれと雨のにおいを招き入れて、カリンはピアノに向かい、灰色の雲から芝や微光を放つ木々の枝に注ぐ雨足に合わせて、ゆっくりとしたテンポのもの悲しい曲を優しく弾いたものだ。そんなとき家路をたどる私は、夏のにわか雨の下で伸びやかに横たわる芝庭を登ってきて、ツグミのやかましいさえずりと——たしか——シヨパンのプレリユードに、気づいたものだ。私が家へ入ると、カリンは弾く手を止めて、にっこりしながら、鍵盤から手を上げると、両腕を広げて温かい歓迎の気持ちを盛大に表した——ギリシャ神話の女神ヘラかデーメーテルのようなポーズで。あたしのまわりにあるものは

何もかもあなたの贈り物だと、礼を言うため。と同時に、こちらへ来て——おいでなさい——あたしに抱擁されて、感謝の気持ちを今一度受け取ってと言わんばかりに。

このような夜、私たちの体はびったり重なつて——ほとんど動きもなく——港へと漂っていった。推進力も導きなどなしも同然で、歓喜の優しい流れを下り、穏やかな潮流に乗り、やがて抜け出て、最後にひそやかな震えをお互いの全身に残して陸に上がる。するとそこへ雨の響きが戻ってくるのだ。外の庭の湿った香りも。そしてすぐそばの壁には木々の葉の影と、日没の見る間に消える銀の光が揺れていたものだ。

どうして泣かずにいられよう。

昨夜私は、階下からの妙な、かすかな物音に目を覚ます夢を見た——小さな鈴の音のようだ。今は売っていないが、子どものころ、彩色ガラス製の鳥よけベルをつるしておくと、光にきらめき、庭を渡るそよ風に吹かれてちりんちりんと鳴っていた。あの音に似ている。階下の客間へ降りたつもりだった。焼き物の飾り棚の扉が開け放しだったが、人形たちは皆ちゃんと納まっていた——ポウ窯の《リバティとマトリモニ》、陶製のニールの《春夏秋冬》、雌牛にまたがった《ライニツケ》の少女。そう、それにほかならぬ彼女——《ブランコの少女》もある。音はこの飾り棚から聞こえてきたのだ。人形たちが皆泣いていたのだ。人形たちの涙は、細かい水晶の粒になって落ちてくる。砂粒のように微小で薄い。涙は、雪のように、人形たちが立っている濃い緑の敷物をおおいつくしていた。この水晶のかげらの間に、人形たちの塗料や装飾が散っていた。もう原形をとどめていない人形もある。コ

レクシオンはめっちゃめっちゃだ。私はひぎを折って、子どものように泣きじゃくった。「戻ってきてくれ！　ねえ、頼むから、戻ってきてくれ！」そこで、目が覚め、ほんとうに泣きじゃくっている自分に気づいた。

むろん、コレクシオンに何かあったのではないことぐらい、分かっていた。それでも私は起き上がり階下へ行った。もしかしたら、真夜中に二〇ヤードも歩くのもいとわないほど大切なものがまだあるのだと、みずからを納得させるためかもしれない。私は碧い波型のマークがあるコペンハーゲン皿を取り出すと腰をおろし、金箔の、ぎぎぎぎした縁どりと、ロザ・マンディの花をつけた小枝模様にし、見とれた。この意匠は、モーツアルトがまだ二〇代のころ、そしてナポレオンが五〇万の兵を遠征に出しロシアの雪の中で悲惨な目に遭わせる三〇年前のものだ。この大皿は、兵士たちよりもろいが、あのとてもない災難にはかかわっていない——それにこうして私自身の危難をも生き延びたのだ。私は一時間も座りこみ、夜明けの光が空に差し染めるのを見つめたあげく、ようやくベッドに戻った。

私が昔から陶磁器に愛着を抱いていたといえば、真実から離れるだろう。それでいてほんの少年のころでさえ、店へ出かけていくのは、無意識の楽しみであり欲びであった。きれいで、華やかな彩りの焼き物が豊富にある。おもちゃよりすてきだった。紳士淑女、動物たち。カットグラスや四二ピースのディナーセットが飾られていた——スージー・クーパー窯とかウェッジウッド・ストロベリー・

ヒル窯とか——当時はむろん名前は知らなかったけれども。ゴス窯の雌牛や、ロッキンガム窯の雄鹿などは、陶磁工芸品を満載したどこかのすばらしいノアの箱船から迷い出てきたにちがいない、とそう思ったものだ。一度なぞ、どこを捜しても見当たらなかったのも、老嬢のリーさんに、箱船はどこにしまつてあるの、なんて聞いたこともあつたつけ。

「まあ、箱船なんか、要らないんですよ、アラン坊ちゃま」と、彼女は答えた。「洪水は——もう終わったんですからね。そして神様は、二度と洪水は起こらないって約束してくださいました、もう絶対に起こらないだろうって」

「だって——」私が、そんなこと言つたつて普通の木でできた動物たちにはやっぱり箱船があるじゃないかと言う間もなく、リーさんは、「いい子にしてるんですよ、よーごんすか、お店の物に触つてはいけませんよ」と言いつつ、どこかの尊大な、毛皮のコートを着たお客様のご用を承りにすつとんでいった。触つてはいけないというお達しを、私は本能的に厭しいものと受け止めていたが——そのために欲求不満がつるというよりは、かえつてぞくぞくした。なぜならそれはとりもなおさず、店の品が真に値打ち物であるという証拠だつたから。大人の人たち——お客様——でさえ、品物にはお手を触れないでくださいと、慇懃^{いんきん}に頼まれてゐるのを耳にしたこともある。

そしてある日自宅で、母が泣きそうになつたのも見た。母はうっかりして化粧台にのつていた、陶製の箱のふたについている花を欠いてしまったのだ。「くつつければ元どおりになるわ。ねえ、母さん絶対になおしてみせる」と、母は言つた。私が聞きもしなかつたのである。そうして母は、細か

いかけらまで丹念に拾い集めて封筒に入れた。私はだれにも教わらなくても、我が家の暮らしが、これらの貴重で壊れやすい焼き物のおかげで成り立っていることも承知していた。

店そのものも、よそのどの店とも違っていた。清潔でさわやかなにおい。――木箱やかんなくずやおがくずのにおいだ――それに静かだし、日が差しこんで明るく、床はタイル張り。リーさんとフリッターさんはつま先で軽い足音を立てて店内を歩き、自信に満ちてきばきと水差しとか茶器を取り出しにいく。そういう品物のありかを、彼女らは正確に知っていた。「足もとに気をつけて、こちらへどうぞ。お客様がご希望の品は通廊の奥にございますので」

通廊といっても――普通の廊下と違って――大事な店の一部だった。つや消しの窓ガラス、板ガラス張りの屋根、五段の棚が左右の壁にあり、茶碗や受け皿や取り皿や水差しやソース入れや土瓶やペット用の水飲みなどが、どれも決まった場所に並べられてあった。つる草が通路の外壁をはい上がって、屋根を半ば覆い隠していた。通廊の行き当たりに、シダ植物の小庭園と倉庫へ通じる緑のドアがあった。古めかしいマホガニー材とガラス張りのキャッシュ・デスクをおぼろげに覚えている。しかしそれは、私が三、四歳のころにお払い箱になったにちがいない。

私は漠然と、ノースブルック通りの店を誇らしく思っていたのだらう。よそとは一風変わっていたし、清潔だったし、ほのかに光を放つ品がいっぱいあったからだ。店の品が私に貴重なものに思えたのは、単純にそのもろさゆえだった。にもかかわらず、店は私の子ども時代を創り上げていたものもろの、ほんの小さな部分にすぎなかった。店へはそうたびたび行かなかった。私たちは「お店の二

階」に住んでいたわけではない。私たちが住んでいたのは、ウォッシュ・コモンという地域で、当時は村にすぎず、ニューベリー市の一マイル強南にあり、町とケネット谷を見おろせた。

屋敷は——かわらぶき、切り妻造り、外壁の下半分は木材がむき出しで——「ブル・バンクス」と呼ばれている——これは最初の所有者が気まぐれにつけた名で、明らかにベアトリクス・ポターの愛読者だ。それも、以前だれかが教えてくれたところによれば、ポターの作品の質だけでなく、世間を向こうに回した昔の女の独立心を示す手本に対する尊敬だという。私はこの家のほか、家を持ったこともないし、またほかの家に住みたいなどと思ったこともない。

暖かい夜、窓を開け放し、横になって目覚めたまま、私はよく丘の下にあるニューベリー駅で汽車が軌道を入れ替わる音を遠くに聞き、市役所の大時計が時を告げるかすかな音を聞いた。六月にはアゼリアや、夜になるとにおいを放つアラセイトウの香りが忍び入ってはいつの間にやら去っていった。ときには蚊がうなって飛び込んできた。これは電気が消された後ちょっと注意を引きたい際など、便利な口実となった。「ママ、ブンブンかむやつが僕の部屋にいるよう!」または、そのブンブンかむやつの猛襲を覚悟で、ベッドから抜け出して窓敷居にもたれ、空にそびえるコッティントンの森のほうを眺めたりもした。

さもなくば、芝庭の先の野に積まれた真夏の干し草の上を、音もなく低空飛行するフクロウを見ようと待ち受けた。八月には、窓の左手に大きな中秋の満月が昇る。その、つや消しのグロスターチーズを思わせる月の赤味は、オークの木立の上をなぞり、小道を隔ててはるか前方の広大な畑

に延々と並ぶ麦の束を照らしながら、徐々に銀色を帯びていくのだった。

若草がもえ出る三月の宵、芝庭のへりに沿って立つシラカバのこずえからツグミが叫んだ。父は小鳥たちと呼びかけたものだ。「はいはい、聞こえてますよ。それにしてもやかましい、品のないわめき声だ！ さっさとすてきなクロウタドリと交替したらどうかね」広い上に半ば放ったらかしの庭は小鳥の天国で、父は四季を通じて小鳥たちに関心を寄せていた。夏になると芝生にデッキチェアを置いて座り、ひざの上の新聞は読むふりをするだけ、ほんとうの目的と喜びは小鳥の姿と声の観賞にあった。

「キタヤナギムシクイがあそこの下枝のほうにいる」私が、「父さん、お茶が入りましたって」と呼びにいくと、父は指さしながら言った。「やつのは見えないうけど、声は聞こえる」そしてその鳥の歌が終わるときの特徴を聞き分ける方法を教えてくれた。双眼鏡は決して使わなかったが、ときには眼鏡をかけて立ち上がり、用心深く近づいてよく見ようとした。それはゴジュウカラだったり、シャクナゲの植え込みの先にある松の枝陰にいるキバシリだったりした。

「小鳥を生態で見分けられなければだめだぞ。あの『モノモライ』は、まず正面から観察できない。光を背にしているからだ。ほらね」ヨーロッパウソガスモモの芽をついばんでいるのを見ると、父はかんかに怒ったが、それでも小鳥の妨害まではしなかった。

私の姉は——三歳年上で——私といっしょにシジュウカラのために骨をつるしてやったり、硬くなったパンやベーコンの外皮を、ホシムクドリや芝生の水たまりを走っているセキレイのために地面に

置いてやったりした。あるとき斑点の少ないキツツキが、ベランダの端のガラス窓にまっしぐらにぶつかってきて、一分後に父の手の中で死んだことがある。それ以来キツツキは見ない。私がブラッドフィールドの学校にいた五年の間、三月末になると決まって、父から絵はがきをもらったものだ。文面はただ、「今年もチフチャフ（ヨーロッパ産ウグイス科）の声を聞いた」であつた。

ちまたでは——少なくともトーマス・ヒューズが言いだして以来、さまざまの人間が——パブリックスクール（私立男子中高寄宿学校、裕福な家庭の子弟の学校）でなぶり者にされたくなければ自己防衛をせよという。だが私の体験では、特にそれほどでもなかったといえる。ブラッドフィールド校在学中、校長は二人とも（二年生の終わりに校長が代わつた）情にあつく、厳格を重んじる気風は薄かつた。教職員も学生も、概して、この二人の校長の人格を受け継いだ。

けれどもいずれにせよ少年というのは、調和ある行動に対する一種の自然な尊敬心と自己適応の機能とを備えていると、私は思う。攻撃性が強かつたり自己中心的な少年は間違ひなく、自衛か、さもなくば他者の嫌悪やあざけりを耐えるか、どちらかができる必要があるだろう。しかし法外な要求をせず、常識に従つて行動しみずから穏やかな毎日を送ることに満足しているやつだと周囲が見なす少年は普通、私の経験からも、それなりの評価を受けてそつとしておいてもらえるし、自衛のためにきゆうきゆうとする必要もない。生まれつき備わっている尊厳だけでじゆうぶんだ。ともかくも、私に關するかぎりそれでよかつた。

私は穏やかな、事もない五年間を過ごし、一人二人友人をつくつたが、卒業後もつきあつてゆきた

いというほどの願望もなかった。友人たちのほうでも、こちらに對して同様に感じていたのは確かだ。今では、当時の私には他人のハートに矢を射んとする人懐かしい気持ちも強引きも欠けていたと思うし、實際努力する氣も起こらなかったのだ。私は他人を自分の目に映るままに了解し、そのままに突き放したのである。

夏学期の間ブラッドフィールド校では、週三日が半ドンだった。二年目終了後は、クリケットが必修課目でなくなり、氣の向くまま郊外の田舎道をぶらつくこともできた。自転車に乗るときもあり乗らないときもあった。独りになるのは、私の性格とも合った。そういう私のふるまいはおおぴらに認められるようになった。野生の花や鳥の撮影に外出し、よくできた写真のさやかな展示が、毎年恒例の科学展で賞を得てからである。サギが巢に降りてきたところを運よく撮った写真を覚えている。数人の教師から褒賞を集めたものだ。

団体競技には関心も能力もなかった。それでいて、フェンシングの選手になった。サーブル（斬る）と突きの併用剣）には関心が持てなかったが、フルーレとエペ（両剣とも突きで勝負）のより繊細で正確な訓練には満足と歎びすら見いだした。マスクをつけた対戦相手とは、突けば引く、引けば突くというぐあい、敵意のあるぶつかり合いではない。緊張した審判団、刃が擦れ合ったり軽くぶつかる金属音、ふいに「ストップ！」の聲が上がると、続いて主審が細かく試合経過を総括し判定を下す。統制がとれ、礼儀にかなない、おごそかなこれらのことは、私から見れば、スポーツにあるべきすべての要素だった。